様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８４４１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１８４

研究課題名（和文）住吉広行・広尚・弘貫・広賢研究－他派との影響関係及び文化事業との関係に注目して－

研究課題名（英文）A Study of Sumiyoshi Hiroyuki, Hironao, Hirotsura, Hirokata

研究代表者
宮崎　もも（Miyazaki, Momo）

公益財団法人大和文華館・その他部局等・学芸部課長

研究者番号：１０４１６２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸幕府の御用絵師として活躍した住吉広行・広尚・弘貫・広賢の画業の特色を明らかにするものである。四年の研究期間で、以下のことが明らかになった。
まず一つ目は、多くの代表的な作品を実見したことにより、それぞれの画風の特徴や展開について把握することができた。二つ目は、文献調査によって、特に広行や弘貫の具体的な画業の実態について明らかにすることができた。三つ目は、琳派や狩野派、復古やまと絵など、他派のやまと絵系作品との比較により、住吉家の作品が他派の画題や表現にも大きな影響を与えていることを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
江戸時代後期の画壇では日本の古文化に関心が向けられ、やまと絵の古典を学び、復興しようとする動きが活発となっていた。その代表例として、復古やまと絵派や狩野派、江戸琳派などの作品が注目されてきた。それに対して江戸時代後期の住吉家については、「先祖の画風を墨守している」という低評価がなされることが多かったが、作品を具体的に見ると、上記の画派よりも早くより古画模写や古画活用、考証を意欲的に行っており、住吉家の創案した図様が狩野派や江戸琳派、復古やまと派にも影響を与えていることが明らかとなった。よって住吉家は江戸時代後期に隆盛するやまと絵復興の動きを盛り立てた重要な絵師たちであると新たに位置づけた。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the characteristics of the painting styles of Sumiyoshi Hiroyuki, Hironao, Hirotsura, and Hirokata, all of whom worked as official painters for the Edo shogunate. During the four years of research, the following points became clear.
First, by observing many works, I was able to grasp the characteristics and development of each painting style. Second, through research of historical documents, I was able to clarify the specific achievements of Hiroyuki and Hirotsura. Third, through comparison with Yamato-e works of other schools, such as the Rimpa school, the Kano school, and the Fukko Yamato-e school, it became clear that the Sumiyoshi family's works had a great influence on the works and expressions of other schools.

研究分野：近世絵画史

キーワード：住吉派　やまと絵　美術史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、江戸幕府の御用絵師として活躍した住吉広行・広尚・弘貫・広賢の画業の特色を明らかにしようとするものである。従来の住吉派研究では、江戸時代前期に活躍した初代如慶と二代具慶の研究が主であり、江戸時代後期の住吉家の活動については等閑視されていた。しかし、五代広行は寛政度の内裏造営の際に、最も格の高い紫宸殿の賢聖障子を担当し、評価されていることなどが明らかになってきており、住吉家の動向を明らかにすることは、江戸時代後期の画壇を考える上で、重要なものではないかと考えた。

そこで、江戸時代後期に活躍した五代広行以降に焦点を当て、如慶以来の伝統の守旧、あるいは変容について考察するとともに、同時代に活躍した他派の絵師たちとの影響関係を分析し、さらに、御用絵師であることから、為政者の文化事業との関係についても重視して研究を行い、江戸時代後期の絵画史研究においてこれまで埋没していた住吉派の重要性について具体的に明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究は、主に以下の３つを目的とする。

１　従来の住吉派研究では、江戸時代前期に活躍した初代如慶と二代具慶の研究が主であったが、江戸時代後期に活躍した五代広行・六代広尚・　七代弘貫・八代広賢に焦点をあて、その画業の特色を明らかにすること。

２　狩野派、復古やまと絵派、江戸琳派などに代表される同時代の代表的な絵師たちの画題・画風・活動と江戸時代後期の住吉派の絵師たちとの影響関係を明らかにすること。

３　住吉派は御用絵師であることから、為政者の文化事業との関係についても重視して研究を行い、住吉派の制作活動と為政者の関わりを明確にすること。

３．研究の方法

４年の期間の中で、作品調査と文献調査を柱に以下の方法で研究を進めた。

まず、作品調査について。本研究の基盤となるのが、五代広行以降の住吉派作品のデータ収集である。国内外の美術館で可能な限り作品調査を行い、データの集積に努めた。作品調査に際しては、画題、画風だけでなく、落款や箱書、付属品といった付随する文字情報も収集し、整理分析を行った。住吉派当主の作品の画題・画風を把握した上で、同時期の狩野派、江戸琳派、復古やまと絵派などの絵師たちの作例にも視野を広げ、住吉派による画題の選択や構図、描法が、同時代の他派の作例とどのような関係にあるのかを検証し、住吉派の特色や他派に及ぼした影響について考察した。

つづいて文献調査について。作品調査と並行して、各美術館や博物館が発行する所蔵品目録、展覧会図録、及び明治から現代にいたる売立目録の調査を行い、本研究の対象となる作例の抽出作業を行った。こうして得られたデータを解析することで、現存作例との対照、どのような画題が求められたのか、など、より広範な視点で住吉派の画業を捉え、具体的に明らかにした。また、江戸時代から明治時代に編纂された画史、画論、地史や、『住吉家伝来記録類』『住吉家奥御用日記』をはじめとする住吉家関係史料の調査を行い、五代広行以降の事績データの集積を試みた。さらに幕府関連史料の調査を行い、住吉派の画業と関わる文化事業についてデータを集積した。住吉派の作品データ、事績データと合わせて考察し、江戸時代後期の住吉派の果たした役割について多角的な視点から考察した。

以上のデータ集積を軸に、整理分析を行い、江戸時代後期の住吉派の活動の実態と絵画史における位置づけを明らかにしていくことを目指した。

４．研究成果

本研究で得られた成果は、以下の四点に集約される。

一点目は、五代広行・六代広尚・　七代弘貫・八代広賢の多くの代表的な作品を実見したことにより、それぞれの画風の特徴や展開について把握することができたことである。

二点目は、文献調査によって、特に広行や弘貫の具体的な画業の実態について明らかにすることができたことである。

三点目は、琳派や狩野派、復古やまと絵など、他派のやまと絵系作品との比較により、住吉家の作品が他派の画題や表現にも大きな影響を与えていることを明らかにすることができたことである。

四点目は、広行をメインとして取りあげる初めての展覧会「住吉広行－江戸後期やまと絵の開拓者－」を代表者が勤める大和文華館で開催したことである。展覧会の図録論文やシンポジウム発表では、広行が若い頃より古画研究を熱心に行い、考証を熱心に重ねて寛政度の賢聖障子制作を行って高く評価されたことなど、広行の画業とその特徴を明らかにした。江戸時代後期の画壇では、国学や歴史考証の隆盛、外圧の高まりなどと関連して、日本の古文化に関心が向けられ、やまと絵の古典を学び、復興しようとする動きが活発となっていた　。その代表的な絵師たちとし

て、復古やまと絵派と後世に名付けられる田中訥言、浮田一蕙、岡田（冷泉）為恭、狩野派の晴川院養信、江戸琳派の祖と言われる酒井抱一などが注目されてきた。江戸時代後期の住吉家の絵師については、「先祖の画風を墨守している」という低評価がなされることが多いが、広行の作品を具体的に見ると、上記の絵師たちよりも早くより古画模写や古画活用、考証を意欲的に行っており、広行の創案した図様が狩野派や江戸琳派、復古やまと派にも影響を与えていることが分かった。こうした点から、広行は江戸時代後期に隆盛するやまと絵復興の動きを先導した重要な絵師であると位置づけることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮崎もも	４．巻 1537
２．論文標題 住吉広行筆舞楽図	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国華	６．最初と最後の頁 35－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎もも	４．巻 225
２．論文標題 住吉弘貫の生年、年齢表記について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美のたより	６．最初と最後の頁 9－10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎もも	４．巻 144
２．論文標題 江戸時代後期の住吉家の動向ー五代当主広行を中心にー	５．発行年 2024年
３．雑誌名 大和文華	６．最初と最後の頁 15－30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎もも	４．巻 139
２．論文標題 酒井抱一の浮世絵制作の背景	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大和文華	６．最初と最後の頁 41－54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮崎もも	4．巻 42
2．論文標題 中野其明筆「富士図屏風」について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美術フォーラム	6．最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 宮崎もも
2．発表標題 住吉広行の画業とその影響
3．学会等名 大和文華館シンポジウム「住吉広行とその流れ」
4．発表年 2022年

1．発表者名 宮崎もも
2．発表標題 住吉家研究の拡がり －酒井抱一のやまと絵画題作品と鈴木其一の出自問題に関連して－
3．学会等名 美術史学会西支部例会
4．発表年 2023年

1．発表者名 宮崎もも
2．発表標題 注目してほしい江戸時代後期のやまと絵師・住吉広行
3．学会等名 徳島市立徳島城博物館美術史アカデミー「江戸のやまと絵」（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名 宮崎もも
２．発表標題 江戸時代やまと絵の動向と住吉派の展開
３．学会等名 徳島市立徳島城博物館講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮崎もも
２．発表標題 絵画を究める　美術の見方　酒井抱一
３．学会等名 NHK文化カルチャー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮崎もも
２．発表標題 酒井抱一　温故知新の慧眼
３．学会等名 徳島城博物館美術史アカデミー（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 宮崎もも	４．発行年 2022年
２．出版社 大和文華館	５．総ページ数 177
３．書名 住吉広行ー江戸後期やまと絵の開拓者ー	

１．著者名 筒井忠仁編、宮崎もも他著	４．発行年 2023年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 548
３．書名 仏師と絵師　日本・東洋美術の制作者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関